O8　盤亀台遺跡の捕鯨図・鯨類画をめぐる日韓の動向

平口哲夫（金沢医科大学）

Looking the trend of Japan and Korea about whaling and cetacean pictures of rock engravings at Bangu-dae.

Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University)

セト研第14回大会研究発表O7で紹介のＫＢＳテレビ・スペシャル番組「3000年前のクジラ捕り：蔚山岩刻画の秘密」(1999)によれば，盤亀台岩刻画には現在韓国沿岸で見られる10種の鯨類が描かれているという．しかし，この番組で具体的に種名が掲げられているのは，マッコウクジラ，セミクジラ，シロナガスクジラ，シャチ，コククジラ，計5種のみである．しかも，コククジラという種名で紹介されている映像は，実はコククジラではなく，セミクジラ（またはホッキョククジラ）やザトウクジラのものである．コククジラの特徴（咽喉部の短い畝または溝）を示す絵が盤亀台岩刻画に見られるにもかかわらず，そのことを指摘した論文（平口，1990；1991）の情報が正確に伝わっていないという感がする．

シロナガスクジラとされたものは，盤亀台岩刻画の中で最大（全長75.5cm），体軸に沿って10本以上の畝が長く表現されていることから，ナガスクジラ科のクジラの腹面を描いたものと考えられるが，韓国近海に回遊してくる頻度の高いナガスクジラ類に絞るならば，シロナガスクジラよりもナガスクジラである可能性が高い．ナガスクジラ科のクジラの中で比較的捕獲しやすいのはザトウクジラであり，この絵に描かれた鯨体のプロポーションはナガスクジラ類よりもザトウクジラに近いが，しかし前鰭はザトウクジラほど大きく描かれておらず，また，盤亀台岩刻画の鯨類は実際よりも前後に圧縮されて描かれる傾向がつよいことから，やはりナガスクジラである可能性が高いと思われる．

この番組では，従来演者が種の同定を保留してきた絵について，肯定的に受けとめることのできる指摘もいくつかなされている．その一つに，鯨体腹面の頭部側に点刻がなく，尾部側に点刻があるという例について，点刻のない部分はシャチの大きな白斑に相当するという見解がある．

盤亀台岩刻画にはクジラと船を組み合わせた捕鯨図が2組あり，一方の図は，船の全長18.5cm，19名もの漁師が乗り込んでおり，舳先の人物が持つ綱は船体とほぼ同じ長さの鯨体につながっている．この番組で紹介された図の場合，綱に浮き袋がついているように表示されているが，報告書（黄・文，1984）ではそのような表示はされていない．あたかも浮き袋に見えるのは単なる岩のくぼみにすぎないと否定する人もいるのである．

もう一方の捕鯨図は，7人の人が乗った船と2頭の鯨類が組み合い，大きいほうのクジラは船体の2倍の長さで描かれており，しかも格子状に区分けされている．番組では，この区分けを解体・分配作業を示すものとし，インドネシア・ラマレラ村のマッコウクジラ漁やエスキモーの鯨肉分配規則などを比較資料として紹介している．

岩刻画の描き方には，面全体を彫る面刻法と，輪郭だけを掘り出す線刻法の二通りがある．面刻画のほうが安定的に配置されているのに対し，線刻画は全体的に散漫に配置されている．面刻画の上に線刻画が刻まれている例があることから，面刻画を描いたあとの空間に線刻画を描いたと推測されている．また，面刻画には海生動物が多く，線刻画には陸生動物が多く描かれている．この違いについて，番組では，海進期に盛んだった海洋漁撈活動が海退とともに有畜農耕・陸獣漁活動に移行していったという説を紹介している．この説が成り立つためには，この自然的・文化的変化が約3000年前，つまり紀元前1000年頃に起きたという証拠を明確に示す必要がある．